

農工大から皆様に心から感謝を ～鳥取大会の気持ちと共に駆け抜けた東京大会～

第71回日本木材学会大会（東京大会）

運営委員長：梶田真也

実行委員長（執筆者）：吉田 誠

実行委員会総務担当：近江正陽

実行委員会会計担当：粕谷夏基

委員：佐藤敬一

委員：安藤恵介

委員：堀川祥生

委員：半 智史

委員：小瀬亮太

執筆日：令和3年5月17日

【はじめに】

年次大会を終えて2ヶ月ほど、数ヶ月間にわたる嵐のような準備期間が信じられないほど平穏な日々の中で、もはや農工大で年次大会を開いたのかどうかさえもあいまいになりながら、それでも皆様から多くの温かい労いのお言葉を頂戴し、それによってようやく「ああ、本当に年次大会は無事に開催できたのだな」と認識するような、そんな不思議な感覚です。思い返してみると、我々実行委員会は、木材学会として初めてのオンライン開催ということで、大きな不安の中で年次大会当日を迎えました。初日の口頭発表が始まる直前、大会本部として設定した農工大の広い教室にたくさんのパソコンが並んだ中で、農工大の実行委員メンバーと学生がパソコンの前に座り、その部屋の端の方では応援に駆けつけてくださった常任理事の先生方と事務局の皆様がそれをじっと見守り、シーンとした張り詰めた空気の中で、誰も何も発せずじっと口頭発表の開始を待つ、あの数分間の、静寂と緊張のみが教室中を支配するような空気感だけは今もはっきりと思い出されます。その記憶がなくならないうちということで、現在、実行委員会は、大会での反省点や改良点を含めて振り返りと引き継ぎ事項の整理をしております。したがって、まだ皆様に詳細なご報告ができる状況になっておらず、ここでは簡単にご報告と共に、ただただ皆様に感謝をお伝えしたいと思い、文章を書いております。皆様に感謝をお伝えする場を与えていただきました、木材学会広報委員長の原田寿郎理事に御礼申し上げます。

【東京大会の概略】

「鳥取大会と共に」、これが東京大会を作り上げる上で最も大切にしたい言葉です。初めてのオンライン開催、参加・発表登録やプログラム編成などの管理システムの刷新、そして日本森林学会との合同大会など、色々のご報告したいのですが、現地開催を中止せざるを得なかった鳥取大会担当の皆様の気持ちを携えて臨んだ年次大会であったことを第一に皆様にお伝えしたいと思います。年次大会を準備する中で、色々な問題が頻発し、混乱の中で心が折れそうになるときも多々ありましたが、鳥取大会との引き継ぎで頂戴した「東京大会は鳥取大会の分も背負って、良い年次大会をお願いします」という言葉を心の支えにして、なんとかやってこれました。

さて、第71回日本木材学会大会（東京大会）は令和3年3月19日から21日まで東京農工大学農学部キャンパスでオンライン形式で実施されました。本大会は、日本森林学会との合同大会でしたので、両年次大会参加者は互いの年次大会発表を自由に視聴できる形式として運営しまし

た。発表者は口頭発表が 257 件、ポスター発表が 210 件ということで、例年と比較してポスター発表件数がやや少なかったものの、コロナ禍の影響でオンライン形式となり、懇親会も開催できなかったにも関わらず、842 名にもものぼる多くのご参加をいただきました。大会では、皆様にオンラインの雰囲気をつかんでいただくため、オープニングセレモニーおよび大会説明から始めました。その後、初日の午前中にポスター発表、午後からは口頭発表へと進みました。2 日目は午前中に口頭発表、午後は学会賞等授与式、3 日目は午前中が口頭発表でした。クロージングセレモニーでは各発表賞の授与（受賞者の皆様、おめでとうございます）のあとに、次回大会実行委員長の岐阜大学の光永徹先生が次回大会についてご案内されました。その後、3 日目の午後は日本森林学会と合同の公開シンポジウムおよび若手の会となりました。

【東京大会担当メンバーの紹介】

東京大会の担当は農工大の教員がコアメンバーとなり、運営委員長を梶田真也先生、実行委員長を吉田誠とし、総務担当が近江正陽先生、会計担当が粕谷夏基先生、合同シンポ担当が佐藤敬一先生と堀川祥生先生、HP 担当が安藤恵介先生、オンライン担当が半智史先生、プログラム担当が小瀬亮太先生という割り振りで実施しました。また、名古屋大学の松下泰幸先生、青木弾先生、稲垣哲也先生、九州大学の横田慎吾先生、京都大学の築瀬佳之先生にも実行委員として参画いただき、強力なサポートをいただきました。農工大のポスドクである田川聡美さん（現、信州大学）と小嶋由香さんには、当日の会場管理を手伝っていただき、お二人とも大活躍でした。今回の東京大会の一番の不安材料が実行委員長である私の脆弱さであったことは否めませんが、梶田運営委員長とコアメンバーとなった農工大の実行委員が一丸となって土曜日や日曜日を問わず夜遅くまで作業をこなし年次大会を作り上げてまいりました。今回はオンライン開催でしたので、実行委員長は年次大会中に皆様の前にお顔を出すこともございましたが、裏方になった実行委員の先生方のお顔は見えにくかったと思いますので、ここに書かせていただきました。船田良会長も多忙な中、あたかも実行委員の一員かのように一緒に準備に携わっていただいたことをここにお伝えさせていただきます。また、特にプログラム委員長の九州大学の近藤哲男先生には、準備段階からたくさんのご支援をいただきました。近藤先生のサポートがあつてこそ、農工大の実行委員会メンバーは安心して初めてのオンライン大会に向けて準備を進められたと思っています。本当にありがとうございました。

大会期間中は、農工大府中キャンパス内の広い教室に大会本部を置き、実行委員会の農工大メンバーおよび学生アルバイトだけでなく、常任理事の先生方と事務局の皆さんにもいらっしやっただきました。また、次回大会からの視察として、福島和彦運営委員長（名古屋大学）、光永徹実行委員長（岐阜大学）、稲垣哲也先生（名古屋大学）も農工大入りしてくださいました。当日は、総務担当常任理事の五十嵐圭日子先生（東京大学）をはじめ、多くの先生方に色々サポートいただきました。心から御礼申し上げます。

【大会スローガンと過酷な大会準備】

「未来を変えるー調和と革新」、これが運営委員長の梶田先生が提案くださった大会スローガンです。環境、資源、エネルギー問題などに直面する未来に、人類や環境と高い調和性をもつ木材を研究対象とする木材学会がどのように貢献していくべきか、どのような革新が必要かを考える契機にしたいという運営委員長の気持ちと、コロナ禍で年次大会開催が危ぶまれる状況においても、オンラインという技術革新をもって現状に調和して年次大会を開催するという

決意、さらには合同大会ならでの日本森林学会との調和までを踏まえたものでした。

その一方で、大会の準備は混迷を極めました。まずは、対面開催とオンライン開催のどちらにするのかという決断からはじまって、オンラインに決まってからも全くノウハウがないため、オンライン開催経験のある他学会から情報收拾し（特に日本植物学会第 84 回大会の総務をご担当された名古屋大学の芦荻基行先生には大変お世話になりました）、最終的に口頭発表に Zoom ウェビナーを、ポスター発表に E-ポスターを使用することに決めました。今でこそ、講義や会議、学会などで色々経験を踏んでいますが、当時は何が何やらわからない中で、一つ一つシステムを吟味し、各機関のオンラインシステム使用状況の把握につとめ、最終的に決定するまでのプロセスは暗中模索で常に自信を持ってない中でのものでした。システムが決まってからは、詳細な準備が始まりました。実行委員会で何度も練習を重ね、座長・発表者・視聴者の観点からの問題点の洗い出しや、問題発生時にすぐに実行委員が対応できるようにシステムの習熟を目指しました。できる限り皆様に円滑にご参加いただくために、座長の皆様との練習や発表者の事前試写も実施し、また、座長・発表者・視聴者のマニュアルを作成し、HP やメールでお伝えするなどといった対応も致しました。今回はオンライン形式に加え、複数座長制に変更したこともあり、座長の皆様には大きなご負担をおかけしてしまったこと、ここで改めましてお詫びと心からの御礼を申し上げます。また、ポスターを事前にアップロードする必要があったために混乱を生んでしまったり、口頭発表でもいくつか課題点がありましたが、発表者の皆様と一緒に年次大会を作り上げていくような気持ちでご参加くださったことで、我々実行委員もことあるごとに助けて頂きました。参加者の皆様の温かいご配慮にも厚く御礼申し上げます。

プログラム集および要旨集の編集作業は実行委員会で実施しましたが、後述の通り、今回から新しい発表登録システムとなったことから、その影響でプログラム集作成にも多くの問題が発生しました。これについては、プログラム委員長に相談に乗っていただきながら対処しましたが、最終的には実行委員会の力技で乗り切れるしかない、という決断の元、実行委員会一丸となって徹夜に近い作業を重ねて、なんとか乗り切ることができました。印刷自体は今回からアドスリー社にお願いしましたが、非常によく対応していただきました。

【参加・発表登録や発表プログラム編成などの管理システムの刷新】

今回から、参加・発表登録やプログラム編成、オンライン発表サイトにはアトラス社が提供する Confit システムを用いることになりました。このシステムについては、使いやすかったというご意見がほとんどでしたが、従来とは違うシステムに参加・発表登録時に混乱してしまった方もいらっしゃったようでしたので、ここであらためてお詫び申し上げます。今後はよりスムーズにご登録いただくためにはどのような方法が良いのか、今一度、整理したいと思っております。参加登録、登録情報管理については実行委員会だけではなく、事務局の皆様の多大なご努力でなんとか困難を乗り切れました。事務局の皆様にご心より御礼申し上げます。また、アトラス社の対応が素晴らしかったことも我々が助けられた大きな要因でした。

プログラム編成については、新しいシステムを導入したにも関わらず、プログラム委員長をはじめ、プログラム委員会委員の皆さま、プログラム編集委員会委員の皆様、部門委員の皆様に多大なご尽力を頂き、円滑に実施できました。本件はプログラム委員長の近藤先生がたくさんの苦労話をお持ちかと思っておりますので、ここで私からのご説明は控えさせていただきます。

【日本森林学会との合同開催】

本大会は日本森林学会年次大会（運営委員長：土屋俊幸 農工大名誉教授）との合同大会でしたので、両学会年次大会担当間で密な連携を取りながら準備を進めてまいりました。特に、両年次大会がいずれも農工大担当であったことは、両者の連携をスムーズにする上で大いに役立ちました。両年次大会担当で定期的に合同会議を開催して情報共有をはかりましたが、最初は月に1回程度だった合同会議が大会が近づくにつれ頻度を増し、最終的には毎週開催されるまでに至りました。

合同大会の大きな特色としては、（1）互いの発表を自由に視聴できること、（2）合同シンポジウムの開催、（3）合同若手の会の開催、が挙げられます。両者の発表システムが異なることから、実際に互いの学会のオンラインシステムを行き来できるのかという心配は最後までつきまといましたが、なんとか無事に終えることができました。

合同シンポジウムは両学会および特定非営利活動法人 才の木、公益社団法人 国土緑化推進機構との共催で「シン時代の森林・木材を考える」と題して実施されました。土川覚副会長の司会で、船田良会長の挨拶、その後、千葉一裕氏(東京農工大学学長)、本郷浩二氏(林野庁長官)、高野律雄氏(府中市長)、上林山隆氏(東京都産業労働局農林水産部長)、Yoon Soo Kim 氏(国際木材科学アカデミー・会長、元・韓国全南国立大学総長)からご挨拶を頂きました。次いで、土屋俊幸氏(日本森林学会年次大会運営委員長・公開合同シンポジウム実行委員会委員長・東京農工大学名誉教授)から趣旨説明をいただいた後、シンポジウムへと移行しました。シンポジウムは、才の木理事長の竹村彰夫先生を司会とし、プラスチック海洋汚染の第一人者である農工大の高田秀重先生を基調講演者として迎え、農工大の五味高志先生、森林総研の石崎涼子先生、住友林業株式会社の中嶋一郎氏、名古屋大学の福島和彦先生にご講演いただきました。また、講演後にはパネルディスカッションも実施いたしました。最後に、丹下健氏(日本森林学会会長・東京大学)のご挨拶で閉会となりました。両年次大会の参加者は Zoom ウェビナーで視聴いただきましたが、YouTube 配信することで一般公開もしたことで、視聴者は約 1400 人と盛会となりました。

合同若手の会は、「どんな木がいい木？」と題して、両学会から話題提供をいただき、その後、意見交換も行いました。遅い時間帯でしたが、参加者は 105 名を超え、6 名の素晴らしい発表をもとにして、意見交換も活発になされ、非常にアクティブな会となりました。このような取り組みは今後も継続してもいいのではないかという感想も多くいただき、両学会の交流に大きく貢献できたと思っております。

【さいごに、皆様へのお礼を】

今回の年次大会について、皆様から「とてもスムーズな運営でしたね」「大きな問題もなく楽しく参加できました」などなど、非常にありがたいお言葉を多数頂戴しました。これは座長、発表者、学生さんも含めた全ての参加者の皆様が、実行委員会と一緒に年次大会を作り上げようと考えてくださったおかげだと、心から感じております。本当にありがとうございました。

その一方で、皆様から見るとスムーズに感じた（のかもしれない）運営の裏で、実は実行委員会側では、準備段階から年次大会期間中までを通じて、表現できないほどの大混乱の中で進んで参りました。したがって、実は我々実行委員は、皆様がおっしゃるほどスムーズな運営だったのか、実際にどれくらいまで運営できていたのかが客観的に把握できておらず、うまくできなかった課題点ばかりが印象に残っているというのが本当のところでは、そういう意味では、皆様が、

この年次大会に参加してよかったと思ってくださったのであれば、我々も救われる気がします。そして、我々のもう一つの重要なミッションが、この経験を次の大会に引き継ぐことです。次回大会は、素晴らしい大会の実現が確信できるメンバーが揃っておますので、あとは我々がきちんと引き継ぎをするだけだと思っております。次回大会の先生方、これから引き継ぎなどもございますが、どうかよろしく願いいたします。

年次大会を実施するにあたり、各企業様にはバナー広告、プログラム集での広告も含めて多大なご協力を頂きました。ここに謹んで御礼申し上げます。また、開催地である東京農工大学農学部には、コロナ禍の中にも関わらず、色々なご配慮をいただきましたので、感謝申し上げます。

前回大会ご担当の皆様、鳥取大会の気持ちとともに作り上げた東京大会はいかがでしたでしょうか？鳥取大会の皆様の気持ちに少しで報いることができたでしょうか？いつか、コロナ禍を乗り切れた後に、美味しいお酒と一緒に語り合いたいです。

そして、農工大の学生さんたち、本当によく頑張ってくれました。本当にありがとうございました。手伝いはもちろん、この1年間、皆さんの指導教員はその時間の多くを年次大会の準備に捧げてきました。したがって、おそらく、指導教員になかなか時間を取ってもらえなかったりということがあったと思います。その中で、しっかりと研究を進め、農工大からたくさんの発表件数がありましたし、学生の皆さんの自立心と頑張りには頭がさがる思いです。

最後に、第71回日本木材学会大会（東京大会）の運営に関係した皆様、参加者の皆様、発表者の皆様、全ての方にお一人お一人お礼を申し上げることは物理的に困難ですので、この場をお借りしまして、実行委員長としてすべての皆様に御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

以上、この辺で、このとりとめのない文章を閉じたいと思います。